

# Ⅳ シンポジウム

## 開催概要

アドバイザー派遣参加園の保育士より活動事例の紹介を行い、有識者から助言や意見等を伺うとともに、アドバイザーと有識者によるパネルディスカッションを実施することで、子供主体の保育に関する理解を深め、普及啓発等を実施。

動画配信

令和5年1月18日～



活動報告、シンポジウム、セミナー・交流会のアーカイブ動画を、東京都福祉保健局で公開中  
東京都福祉保健局ホームページ  
▶ [https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/koho/kodomo\\_syutai.html](https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/koho/kodomo_syutai.html)

## 当日プログラム

### 活動事例の紹介

#### 参加園

- ① ポピンズ ナーサリースクールー之江  
〈近隣公園における保育者も楽しむ豊かな体験〉  
保育者：戸川 晃子施設長／今野 美由紀さん
- ② にじいる保育園 石神井町  
〈自然の中で子供の興味やつぶやきに寄り添う保育〉  
保育者：鈴木 幸子園長／  
中島 徹さん／西川 綾香さん



#### アドバイザー



野村 直子 氏  
new education  
LittleTree 代表



久保田 修平 氏  
new education  
LittleTree

#### 有識者



汐見 稔幸 先生  
一般社団法人家族・保育  
デザイン研究所 代表理事／  
東京大学名誉教授／白梅  
学園大学名誉学長



宮里 暁美 先生  
お茶の水女子大学  
アカデミック・プロダクション  
寄付講座教授

### パネルディスカッション

テーマ：“自然”と“子供主体の保育”

#### パネリスト

- 汐見 稔幸 先生  
一般社団法人家族・保育デザイン研究所 代表理事／  
東京大学名誉教授／白梅学園大学名誉学長
- 宮里 暁美 先生  
お茶の水女子大学  
アカデミック・プロダクション寄付講座教授

- 野村 直子 氏  
new education LittleTree 代表
- 久保田 修平 氏  
new education LittleTree

## ■アドバイザー派遣参加園による活動事例紹介

### 1. ポピンズナーサリースクールー之江

テーマ 保育者も楽しむ近隣公園における豊かな体験

#### 紹介エピソード

保育同行の3回をそれぞれ違う公園に出かけ、固定遊具のある小さな公園やビオトープなどの自然が豊かな公園での活動を行った。その中で先生方も体験を楽しんでいる姿が印象的だった。

1. 園で飼育するヤモリのエサ探しで、虫が苦手な子供が思わず虫に触っていた。
2. 公園の木になる柿の実に興味を示し、匂いをかいだり取ろうとする姿に子供たちが集まってきた。
3. カツラの木の落ち葉が、カaramelの香りがすることに驚いた保育者の言葉に子供たちが反応し集まってきた。
4. 吊り橋遊具のある公園で、吊り橋渡りを怖がる子供の姿。保育者も自分で渡ってみたら怖かった。
5. 公園の中の小川をジャンプして飛び越える子供たち。以前に3歳児が落ちてしまったことがあったが、多少濡れてもいいと、保育者がおおらかに見守っている姿。



#### ！ 保育者による気づきのポイント

- 子供たちの「あれは何?」「これは何?」という質問に、知っていても子供に考えさせ、調べさせる大切さを実感した。
- 子供の主体性を伸ばすことに、何か特別な方法があるのではないかと思い参加したが、先生として教えたいというウズウズした気持ちを抑えることが、子供たちの主体性を伸ばすことにつながるのではないかと感じた。
- 質問大好きな子供たちと一緒に過ごしている中で、自分の持っている知識を教えたいという気持ちがあった。

#### 有識者によるコメント

- この事業での体験を通じて、何かを感じた、ということ自体が大きい。最初の映像にあった、コオロギを追いかける子供の手の真剣さは、子供たちの共同作業にもなっていた。子供たちは一つのことをしながら、こんなにも心と体を動かしている。こういう姿を本当に大事に見ていきたいと思う。
- 東京都の場合、園庭が必ずしも保障されていないところがたくさんある。子供たちがいろいろな体験を保存するためにも、こうした自然公園を利用するというのが、大きな成果を与えると教えられた。
- 保育の質を上げていくためには、振り返りをみんなでやるということも大事。その時に映像があることが振り返りの手助けとなり、事例を共有しやすくなる。
- ヤモリはやっぱり生き物を食べるんだってということを知った時には、おそらく子供たちにとってはとてもショックだったはず。そのショックを経験しなければ自然というものはわからない。命のつながりの中で存在していることを何かの形で感じる機会となったことも、子供たちにとっていい体験だったのではないかと。大変に示唆に富んだ活動事例の紹介になったと感じている。



# Ⅳ シンポジウム

## ■ シンポジウム参加園による活動事例紹介

### 2. にじいる保育園石神井町

**テーマ** 自然の中で子供の興味やつぶやきに寄り添う保育

#### 紹介エピソード

子供の姿をよく捉えながら保育を行っているのが印象的な園。3回の保育同行は、自然豊かで広々とした都立石神井公園で行った。公園内の敷地が広く、3回とも園内の違う場所での活動となった。

1. 虫好きの保育者が、ハチの巣がある場所で冷静に対処していた。以前にハチが飛んできて子供たちがパニックになったことがあり、今回も事前に対応方法を教えていた。
2. 公園までの道のりを楽しみながら歩く様子。花壇に植えてある柑橘系の木に、アゲハチョウの幼虫がたくさん生まれていた。保育者が子供たちの気づきを拾いながら、立ち止まって観察してから次に進む姿が印象的。
3. 公園で出会った近隣のお年寄りから、モミジの種がプロペラのように回って落ちることを教わり、拾い集めて遊びが始まった。予定した場所ではなかったが、子供たちの姿に臨機応変に対応した。
4. 木の根が土から出ている部分をみんなで協力して抜く様子。子供自身が興味を広げ遊びが広がった。



#### ① 保育者による気づきのポイント

- 自然をいかした保育とはどういうものかわからず、子供に何かしなければという思い込みがあった。大人が難しく考えるよりも、その場その場で出会った自然に親しみを持てるように、きっかけ作りをするだけで、子供たちは主体的に過ごすようになるのではないだろうか。子供たちが教えてもらったモミジの種で遊び始めた、という姿に答えがあるように感じる。
- ゲームの好きな子供たちが、いつもゲームのキャラクターになりきって、遊具で遊びたがるがあったが、活動の中でそうしたことを一切言わなくなった。一つの葉っぱから遊びに広がり、部屋の中にいる時よりも一人一人の力が発揮され、輝く場所だと感じた。こうした積み重ねが成長にとって大事なこと。
- 活動の中で保育者も、遊ばせる方法を教わるのではなく、自然の中で実践として知ることができたと感じている。

#### 有識者によるコメント

- 映像を見て保育者が子供たちの興味に気づき、相談しながら活動している様子に、とても良い時間の過ごし方をしていたと感じた。
- 近隣のお年寄りから遊びを教えてもらったような開かれた保育。こういうことができる街であり、大人がいることが子供たちの健やかな育ちを支えると思う。
- ハチの話がありましたが、ハチにもハチの都合がある。それを大事にしながら共生していくためにはどうすれば良いのかを、考えるきっかけになったのではないだろうか。自然と上手に共生できるような子供たちが育つような、学びの多い活動になったのではないだろうか。

## ■ パネルディスカッション

### テーマ “自然”と“子供主体の保育”

保育環境としての自然について考えると共に、子供主体の保育の実践に向けての理解を深める。

#### 〈ディスカッション概要〉

- ① 「主体」という言葉の解釈について
- ② 「自然」の中で子供たちが発見する気づきや驚きに、大人たちが寄り添い共有する重要性
- ③ 「自然」の中で育まれる子供たちのコミュニケーション力

#### ディスカッション概要

### ① 「子供主体」という言葉の解釈について

- 「主体」を「したいようにする」と間違った解釈をし、子供がやりたいようにさせれば良いと考えてしまいがちである。
- 子供を自然の中で保育するということは、子供も大きな意味では自然であることを理解する必要がある。自然の中で子供たちがやりたいことをやりながら、自然との関わりを持たせていくことは保育者の役目である。
- 近くの公園などを活用し外に出ることで、子供たちがのびのびとし、大人たちの心も解放されストレスが軽減するということがある。自然の中でいろいろなことをやりながら子供の中の自然も活性化し、何かに気づいた時にその喜びを表現できる環境を作り出すことが、自然の中の保育の良さだと考える。
- 各園での活動では、自然を活かした保育と主体性を先生たちと一緒に考える中で、自然を怖いと感じている印象があった。そのため安全管理と一緒に話し合うことで、先生たちの中の自然が解放され、子供たちの目線に立つという変化を見ることができた。
- 園の先生たちからの「主体的保育ってなんだろう」「主体的保育で大丈夫？」という問いがとても多く、「主体」は「したい」ようにするものではないということ、丁寧に伝えながら一緒に進むことが求められる。

## ディスカッション概要

### ②「自然」の中で子供たちが発見する気づきや驚きに、大人たちが寄り添い共有する重要性

●動画の中にあつたモミジの種がクルクル回るシーンでは、大人は回るだけを見ているが、子供はもっといろいろな発見をしていると思う。モミジの種が回るの面白い現象だが、それだけに留まらないのが子供であり、そうした子供の発見と一緒に面白がってくれる大人が増える可能性も大事にしたいと思う。



●人間には、自分だけが知っている・持っている、ということを独占したいと思う欲求があるが、同時に自分が発見した驚きや喜びを、一緒に共有したいという欲求も人間の本能としてある。それが素直に出てくるためには条件があり、(子供に対して)まず先生が喜んでる姿を見せ、そして友達も面白いと感じることで絆が一気に強まる。子供の中にも独占欲と一緒に共有したいという欲求の両方があり、どちらを上手に伸ばしていくのかということが保育だと思う。

●みんなと同じことを絶対にやらない、一人でマイペースに楽しみたいという子供がいるが、それがみんなと共有することで喜びの感情が出てくる。自然にはそうしたことを促す可能性があり、自然の中で保育することは、人間の共感力が高まるような効果があるのではないかと感じる。



●子供たちは、自分の喜びを分かち合うことや自然を感じるセンサーはとても優れている。園の先生たちも、子供の気づきや喜びと一緒に楽しむことで保育が楽しくなると思う。

●子供たちは、自分の喜びを分かち合うことや自然を感じるセンサーはとても優れている。園の先生たちも、子供の気づきや喜びと一緒に楽しむことで保育が楽しくなると思う。

## ディスカッション概要

### ③「自然」の中で育まれる子供たちのコミュニケーション力

●保育施設というところでは、共に作り上げ、共感して暮らすということが大事になると思う。今回の事業では、保育同行の後に、保育者たちと「今日はどうだった？」という話をしたが、その時に反省するのではなく何が面白かったか、何が楽しかったかという話をする中で、先生たちとのコミュニケーションが生まれ、次の保育のやり方が見えてきた。コミュニケーションの大事さということを強く感じた。

●ドイツでは園舎を持たずに、毎日、森に出かけていく「森のようちえん」というものがある。そこで森で育っている子供たちと、都会の普通の園で保育している子供たちの、何が違うのか専門家に依頼し調べたことがある。そうしたら意外なものが森のようちえんで育っている子供たちの方が高かった。それは何かというと「コミュニケーション」。つまり、森で遊ぶ時には「そこ危ないよ」とか「こっちに来て」というように声をかけないと一緒に遊べない。(森で遊ぶ中で)知らないうちに人と関わるスキルを身につけている。

●道を歩いている時でも、外ですれ違った園同士が「あの辺にハチが飛んでいました」とか、言葉を交わし合う。園同士、あるいは街の人ともそんなふうに出会った人が言葉を交わすということと、今回のテーマは近いところにあるように感じる。

●自然の中で生活することが子供の成長に何をもたらすか、ということはまだほとんどわかっていない。例えば自然の木は、自分がウィルスでやられないために様々な成分を出している。それを「フィトンチッド」というが、そういうものがたくさんあり、それらが人間の中にどのように作用するかは解明されていない。しかし人間は自然の中で20万年の間暮らしてきたわけで、自然と上手に共生することで心身ともに健康な子供たちを育ててほしいと思っている。

●最初は「自然と子供を主体に」ということに困惑する保育者たちの姿があった。何度か保育同行を繰り返す中で、先生たちも次第に解放され、楽しみながら次の保育をどうしようかと考えているところが見えてきた。このディスカッションの中で大事なキーワードがたくさん上がったが、今回の動画を視聴し皆さんの学びにつながればと願っている。そして保育者たちも、子供たちの声を聴きながら一緒に楽しむことで、頑張らなくとも自然に「子供主体の保育」になるのではないかと感じている。

